

はしがき

気候変動問題への取り組み、独占禁止法、日本との経済連携協定 (EPA)、プラスチック規制、個人情報保護、移民・難民問題、イギリスの離脱などといった、ホット・トピックをきっかけにヨーロッパに関心を抱いたという方は少なからずいる。ヨーロッパは何をしているのだろうか？ 今後どうなるのだろうか？ と興味をもって観察していると頻繁に登場するのが、EU (European Union：ヨーロッパ連合) という存在である。現代ヨーロッパ情勢を知るためには、EUを知る必要がありそうだ……そう感じた方が学生であれば、EUの授業を履修する。社会人であれば、関係する書籍を手にとると聞いている。著者は職業柄、授業を通じて学生と関わりをもつことが多い。

しかしながら、授業で教科書を選定する時、あるいは社会人の方からオススを求められる時には、いつも頭を悩ませる。研究者にとっては良著だと思われる書籍は大抵、法学、経済学、政治学といった特定の学問領域から書かれているため、読み手の専門・専攻を考慮しなければならない。特に学生については、EU研究が学際的な学問だといわれるからなのか複数学部の学生がEUの授業を履修登録している場合があり、全履修者に適合する教科書選定はどこかで諦めなければならない。複数執筆者による書籍を薦めると、執筆者による主張等の違いに戸惑うケースが見られた。単一著者によるバランスのとれたテキストもあったが出版年が少し古く、授業で教科書指定した場合には一部学生が入手できないおそれがあった。数十年かけて紆余曲折を経て発展してきたEUの姿をありのまま読者に伝える書籍は、読者をその膨大な情報量で圧倒することはあっても、さらなる学びに誘うことはそれほど多くなかった。社会人に何かをオススメした場合にはその後の感想が気になり、授業で教科書を指定した場合には補足が必要になった。

必ず補足が必要になるのであればついでにと思い、授業では回によって参考文献を変え、これはという文献を図書館に取り置き (リザーブ) してもらい、学生にそれらを読んでもらって授業で補足して欲しいことについて事前アンケートをとるようになった。年度を重ねると、学生から寄せられる質問、求められ

る話題に規則性があることが判った。各回、どの話題をどの順にするとよいのかという「台本」が、少しずつできあがった。そんなことをおよそ10年続けた結果できあがったのが、本書である。読者、とりわけ学生がその専門・専攻にかかわらず読み進めることができ、気になるころがあれば先輩方が執筆した書籍を手にとってより深く学ぶ、そんな教材作りを心がけた。

本書は、最長で前後期連続した授業で使うケースを想定して、EUの歴史としくみ・政策とに大別した二部構成にしている。半期15回の授業をすべて講義にあてることができる訳でないし、クォーター制を採用しているところではクォーターあたりの授業回数が11回程度だと聞く。そのため、第I部、第II部ともに12講構成にし、授業回数や必要に応じて授業で触れる／触れない、簡単に触れる／詳しく触れるなどを決めていただけるよう、講や節の構成を選定した。詳しくは「本書の構成と使い方」に記すが、EUの歴史的な発展とその取り組みについての導入的、教養的な話題をとりあげるように心がけた。

本書は、授業を履修した学生達との交流を通じてできあがったものである。専任、非常勤にかかわらず、授業を担当したどの大学においても、出席者の2割から3割がラーニング・マネジメント・システム等を通じて毎回事前に質問を投げかけてくれた。そうした投稿や授業期間終了後の授業アンケートでのコメントは、引用・参考文献や話題の選定にできるだけ反映させた。とりわけ、現在の所属機関である大妻女子大学比較文化学部ヨーロッパ文化コースの授業履修者は、質疑や授業アンケートを通して忌憚のない意見を寄せてくれた。御礼を申し上げる。また、10年と少し前、学位論文を提出したばかりの私に、私の専門であるEUを研究し教える機会を継続的に与えてくださった学会の先生方、先輩方に感謝を申し上げる。とりわけ、学生時代の指導教官であった田中俊郎先生（慶應義塾大学名誉教授）には、当初原稿を読んでいただき沢山のご指摘とご助言をいただいた。ここに御礼を申し上げる。もちろん、本書の内容にかかる責任はすべて筆者にある。

法律文化社編集部の畑光様と八木達也様には大変お世話になった。特に畑様には、出版をめぐる厳しい情勢にもかかわらず、本書の出版企画に関心を示してくださり、読者により読んでいただける工夫を助言していただいた。畑様がいらっしゃらなければ、本書は世に出ることはなかった。御礼を申し上げる。

最後に、日頃からあらゆる面で支えてくれている妻、長男、長女をはじめとする家族に感謝する。

本書の構成と使い方

本書の構成

第Ⅰ部はEUの歴史を、第Ⅱ部はEUの運営や各種政策を扱っています。教員は授業回数や授業計画に応じてどの講を扱うかを選ぶことができます。読者は冒頭から通して読んでいただくことも、目次や索引を活用して気になるところから読み進めていただくこともできます。内容的に他の講を参照した方がよいときは、その旨を本文中に明記しています。そちらをあわせて参照していただければ、より深く理解することができます。

各講の冒頭には学びのねらいを掲載し、末尾には論点と題した復習問題をつけています。理解の確認、予復習、課題や試験の準備などに活用してください。各講末尾の論点は、各自に答えさせることもできますし、グループで話し合わせて互いの理解を表明させることもできます。本文中、出典を[著者 発行年、ページ数]や[web資料]という表記方法で示しています。文章中の句点の前に掲載されている場合には、その文に関係するより詳しい情報が出典元に書かれていることを示します。段落の最後の句点の後に掲載されている場合には、段落全体で扱われている事象についてのより詳しい情報が出典元に書かれていることを示します。本書で扱うことができる情報は非常に限られていますので、出典元の記載内容を読んでいただくことがより深い学びにつながります。出典元の詳しい書誌情報は巻末の引用・参考文献リストに一括で掲載していますので、そちらをたよりにひとつでも多くの文献を手にとってください。紙幅の都合があり、本文中に掲げた文献には、過去に授業をした際に図書館でよく閲覧されていたもの、学生が提出した課題・レポートに参考文献としてよく挙げられていたものを選定しています。それだけ先輩学生たちが過去に学びに利用したものですので、さらに学びたい方はそうした文献をぜひ手にとってください。意欲があれば、引用・参考文献が参照している資料や文献にもあたると、さらに学びが深くなります。

なお、第Ⅱ部の本文には「第Ⅱ部資料集」と書かれている場合があります。これはグラフや図表が別途用意されていますというサインです。サイズや紙幅を考慮して、また今後更新する可能性も考慮して、本書に綴じ込むのではなく別途資料集として法律文化社の教材用ホームページ (<https://www.hou-bun.com/>) からダウンロードすることができるようにしました。あわせてご利用下さい。

教員のみなさまへ

各講冒頭の記述(学びのねらい)、末尾の設問(論点)をラーニング・マネジメント・システムや学習支援システムに入力し、授業で扱うご予定の講の主要引用・参考文献を図書館に取り置きしていただくと、学生の予復習、発展学習が進むようです。そうした自主的な学習行動が平常点やレポート・試験における成果に反映されるようにすると、さらに学生の学びは進むようです。なお紙幅の都合もあり、本書には説明が足りない部分や扱うことができていない話題もあります。先生のご専門や知見を授業内説明にて加えていただくと、そして先生のお立場から見てよいと思われる文献を追加して学生にご紹介いただくと、予復習した学生をさらなる理解へと誘うことができると考えます。

学生または一般読者の方へ

各講末尾の設問(論点)にどのように答えるか?という観点から本文を読み進めてみましょう。設問に応答する手がかりに至ることができます。太字になっている語は理解のポイントになっていることが多いため、そうした語同士がどのように関連しているのかを考えることも、深い理解につながります。限られた紙幅で話を展開している都合上、本書には説明不足などところがあるはずです。そのような時には、該当する箇所に付されている出典情報と引用・参考文献一覧をたよりに出典元をたどってみてください。さらに詳しく学び、理解することができます。通常、一冊の書籍で読者にお伝えすることができる情報は限られています。本書を出発点に、別の書籍や論文、さらに別の書籍へと情報をたどることによって知見を広げて、ヨーロッパ統合、EUのおもしろさを堪能してください。